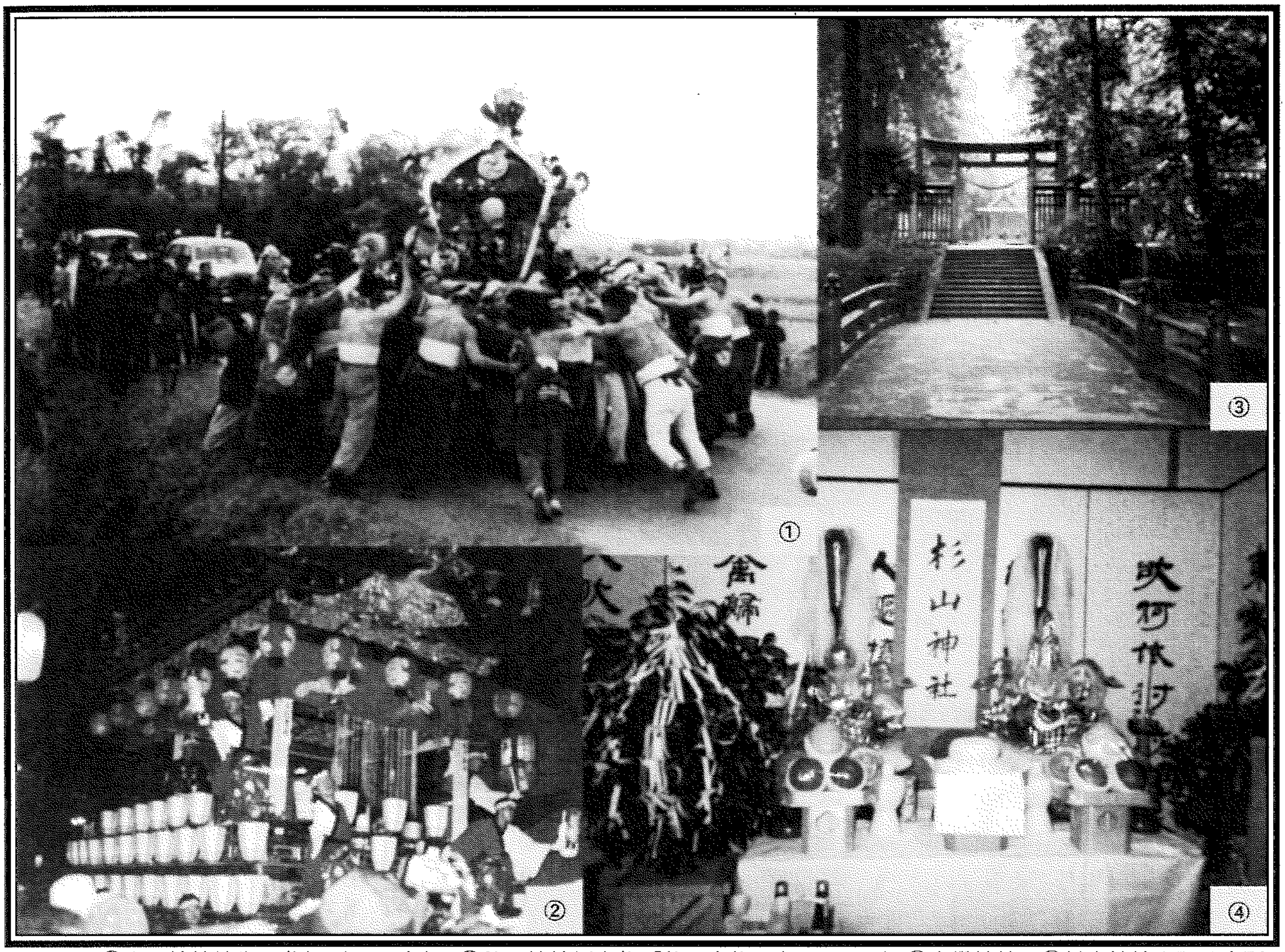
あるむぜお71

府中市郷土の森博物館だより　a l museo NO.71　2005年3月20日



①小野神社神輿の参加（1958 年）　②秩父神社例大祭「秩父夜祭」（12 月 3 日）③金鑽神社　④杉山神社を祀る会所

目次

1-2　武蔵国のなかの「くらやみ祭」
　④国内の６つの神社

3　展示会への招待
　馬場大門　ケヤキ並木の謎

4-5　ノート「ムダ掘」を考える

6　民具発見　⑧終わりなき発見

7　最近の発掘調査
　本宿町で土偶が出土

8　たまＲＩＶＥＲ　ＷＡＲＳ　⑧戦士たちの休息

くらやみ祭

府中市宮町にある武蔵総社・大国魂神社（六所宮）の例大祭。毎年4月30日の品川沖での潮盛り神事に始まり、5月3日、4日の競馬、囃子・万灯・山車の競演と続く。5日夕刻がクライマックスとなる神輿渡御で、6張の太鼓に率いられた８基の神輿が御旅所に入る。神輿は翌早朝に神社に還る。夜中の神輿渡御が特色で、古代武蔵国府の祭の伝統を伝えている可能性が高い。

郷土の森博物館では、10月10日から11月23日まで特別展「武蔵府中 くらやみ祭展」を開催しました。ブックレット5「武蔵府中くらやみ祭」を刊行。1部600円で販売中です。

表紙：武蔵国のなかの「くらやみ祭」④国内の６つの神社

小野一之

大国魂神社には、８つの神様が祀られています。武蔵国内の６つの有力な神社の祭神と、地主神の大国魂神、怨霊の御霊神です。「くらやみ祭」の時には、この８神がそれぞれ乗る８つの神輿が渡御するのです。そのうち国内の６つの神社は次のとおりとされています。

①小野神社（一宮、東京都多摩市）
②二宮神社（二宮、東京都あきる野市）
③氷川神社（三宮、埼玉県さいたま市大宮区）
④秩父神社（四宮、埼玉県秩父市）
⑤金鑽神社（五宮、埼玉県児玉郡神川町）
⑥杉山神社（六宮、神奈川県横浜市緑区）

こうした６神を合祀したことが、大国魂神社の主旨であり特色であったことは、大国魂神社と名前が定められる明治４年（1871）以前、六所宮・六所神社・六所明神・六社などと称されてきたことからもわかります。同じように六所を名にした神社は他にも多くあり、近くでは相模国の総社と言われる六所神社（神奈川県中郡大磯町）があります。その場合も内訳は相模国内の寒川神社・川勾神社・比々多神社・前鳥神社・平塚八幡宮と決められています。（ただし、自社の六所神社も入れて６つと数えています）しかも、武蔵でも相模でも、６神社には序列があり、それぞれ一宮・二宮・三宮……と呼ばれているのです。

では、なぜ、武蔵ではこの６神社なのか。国内の数多い神社のなかでも、この６つが選ばれた理由はどこにあるのでしょうか。まず、６神社の分布を見てみると、地域が偏っていますから、地理的に計画して選んだとは言えません。武蔵国北西部（行田市）の埼玉古墳群や多摩川中下流域（大田区・世田谷区）の巨大古墳の分布地とも違うので、古墳時代の勢力とも関係ありません。二宮（小川）神社のように平安時代中期（10世紀）の国家指定の神社（延喜式内社）に含まれていない神社があることも注意しなければなりません（そもそも総社や六所宮自体が入っていません）。

これはどういうことかといいますと、平安時代後期の11世紀、各国ごとに力のある神社が一宮・二宮などに指定され、合わせて国府内にこれらの神社を合せ祀る総社が設けられたことによると考えられます。「総社・一宮制」は全国的に行われました。おそらく、国府の結束力と権威を高める目的のもと、当時の武蔵国府の政治に参画した国衙の在庁官人（有力な在地領主層、後に武士となっていく）がその本拠地で祀っていた神社が６ヵ所決められたと考えられます。一宮・二宮・三宮‥というのはその力関係が反映されているものと見られます。国府の総社と一宮などの有力社とは、国府での政治や祭礼などを通じて強いネットワークが求められていたはずです。

武蔵国府の総社の祭として始まったと思われるのが「くらやみ祭」です。８基の神輿は大国魂神社（宝物殿）に置かれ、祭の神輿渡御の際に、本殿前から出発して、御旅所の神事の後、再び神社に戻るのが通例ですが、古い時代には、６神社のそれぞれの神輿が実際に府中までやって来ていたと伝えられています。遠方の神社もあるので、そのまま信じられないとしても、相模国の六所神社の祭礼「国府祭」（「くらやみ祭」と同じ５月５日が神輿渡御の日）では、比較的近い神社が多いせいもあって、今でもそれぞれの神輿が各神社から集まって来るスタイルを採っています。「くらやみ祭」でも江戸末頃から昭和34年（1959）まで、一宮の小野神社の神輿が、大国魂神社の一宮神輿とは別に、府中まで担がれて来て、祭礼に参加していたということがありました。

「くらやみ祭」での６神社とのつながりとして、現在では、①各神社の神職が５日午前の例大祭式に参加し（各社）、②各神輿を担当する町内の会所に、該当する祭神が祀られ、そこを各神社の神職が参拝に訪れる（三宮など）、③各神社付近に神輿や太鼓の講中があり、メンバーが祭に参加する（一宮・二宮など）、④各神社の自社での例大祭に、府中の該当する町内のメンバーが参加する（各社）、⑤祭当日、大国魂神社遥拝式が各神社で行われる（五宮など）などの関係が続けられています。

こうしたつながりはそう古い時代ではなく、近代に入ってからできたものもありますが、歴史的な総社と各社との関係に回帰し、武蔵国府の祭礼としての伝統を伝えようという意識の表れと見られるでしょう。

展示会案内

天然記念物指定 80 周年

特別展　馬場大門ケヤキ並木の謎

4 月 29 日（祝）～ 6 月 12 日（日）

オシャレな原宿表参道、杜の都仙台、はたまた武蔵野の成蹊大学や京都の府立植物園などなど、町や施設をイメージづける有名なケヤキ並木は全国にたくさんあります。でもその中で、国の天然記念物に指定されているのはたった一か所、それが府中の大国魂神社参道でもある「馬場大門のケヤキ並木」です。

木の太さだって比べてみてください。どっしり感が違うでしょう。それが歴史の重さっていうものです。表参道 80 数年、仙台 60 年……、府中のは短く見積もっても 400 年です。よく言われているように、源頼義・義家親子が寄進したという説に従えば千年もたっています。もしかしたらもっと前、府中に武蔵国府が置かれていた頃からあったかもしれないのです。いつごろからこの並木があったのか、これが第一の謎。

第二の謎は、その形。今は神社境内の前、旧甲州街道を挟んですぐ北に向けて二列の樹々が延びていますが、つい何十年か前まではそうではありませんでした。江戸時代に並木が四列描いてある絵も残っているのです。それと名称についている「馬場」って何のことでしょう。並木と馬場がどんな形で存在していたのか、調べてみました。

春風とともに若葉が芽吹いてくるとくらやみ祭はもうすぐだし、真夏の木陰は自動車やバスまですっかり覆ってくれます。落ち葉は大変だけれど、その色や音はこの上ない秋の風情。そして冬の青い高い空をバックにしたレースのように繊細な枝々。府中の街の自然にケヤキ並木は絶対欠かすことはできないと誰しも思われることでしょう。

しかし、ずっと昔から府中の人たちはケヤキ並木を愛してきたのでしょうか。住人たちはどんな風にこの並木道と付き合ってきたのでしょう。これが一番知りたい謎の三番目です。これを知ることで、未来の謎、これからの並木との付き合い方のヒントがあるかもしれません。私たちがケヤキ並木を守るのか、ケヤキ並木が私たちを守ってくれているのか。街の環境問題でもあります。

それに植物学的に見たら、ケヤキってどんな性質の樹？こんな謎も織り交ぜながら「馬場大門ケヤキ並木」の過去・現在・未来を土地の人たちとの関わりを軸に考えてみます。展示品には、歴史資料のほか、美術作品、品田健一さんの撮影した写真も並びます。

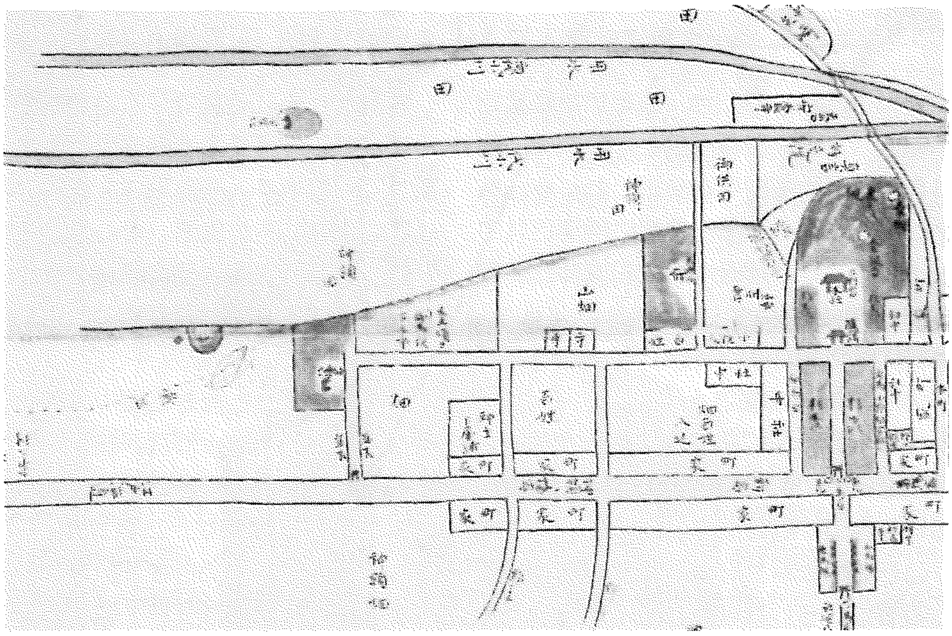
（馬場治子）

2003 年雪の大晦日
撮影：品田健一さん

NOTE

「ムダ堀」を考える

深澤靖幸



『府中領絵図』部分（八幡宿田中家文書・本館寄託）　「新堀」と記されている点線が「ムダ堀」。上が南。

市内清水が丘から白糸台にかけての台地上に、かつて大きな窪地が連なっていました。所によって 1970 年代まで残り、「ムダ堀」と呼ばれたこの窪地は、玉川上水を掘り割ろうとして、失敗した跡と伝承されてきました。この伝承は、杉本苑子さんの小説『玉川兄弟』に取り上げられたこともあって、それなりに知られているようです。

すっかり忘れられていた「ムダ堀」が脚光を浴びたのは、1996 年に行われた発掘調査でした。幅 14 m、深さ 5m の巨大な溝が清水が丘２丁目で見つかったのでした。この発掘をきっかけに、この溝が明治初期の地図にしっかりと描きこまれていることや、江戸時代（享保•元文頃 =1716 ～ 41）の地図にも「新堀」の名で描かれていることが再確認されました。

これ以後、絵図と地図に描かれた「ムダ堀」のルート上で発掘が行われ、その実態が徐々に明らかになっています。

このように具体的な姿を現しつつある「ムダ堀」ですが、その最大の関心は、本当に玉川上水を掘削しようとして失敗した痕跡なのか、に尽きるようです。そして、玉川上水の研究者の多くは、どうやら、この伝承を否定的に捉えているようです。しかし、「ムダ堀」がいつ、どのような目的で、どこからどこまで掘られているのか、という基礎的な事柄すら充分に究明されているとはいえません。「ムダ堀」と玉川上水の関係を云々するのではなく、「ムダ堀」そのものの性格を考える必要があるのです。

▼発掘された「ムダ堀」

さて、前置きがやや長くなりましたが、これまでの「ムダ堀」に関する知見をまとめてみましょう（右頁図参照）。まずそのルートは、上述の地図や絵図との対応から、A 地点から D 地点までは確実に確認できます。ただその規模は、A 地点が幅、深さともに最大であるのに対して、D 地点では幅 7.5 m、深さ 1.2 mとなっていて、徐々に規模が小さくなっているようです。

また、E ～ G 地点でも溝跡が見つかっていて、ムダ堀の延長とする見解もありますが、横断面の形状が A ～ D 地点とは大きく異なり、断定することはできません。

発掘調査は、「ムダ堀」の年代を探る材料も提供してくれました。A 地点では、溝がほぼ埋った時点で火山灰が堆積していたのです。この火山灰は、宝永スコリアと呼ばれるもので、1707 年の富士山の噴火によってもたらされたものです。したがって「ムダ堀」は、18 世紀初頭にはほぼ埋まっていて、掘られたのはそれ以前ということになります。

またＢ地点では、溝の底部近くの土壌を自然科学分析した結果、常時であるかは断定できないものの、滞

水していた可能性が指摘されています。

▼「ムダ堀」の初見資料

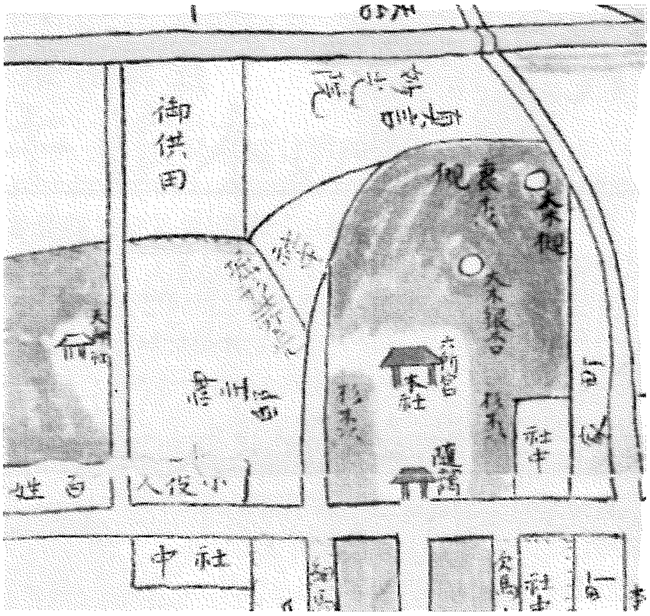
今のところ、発掘調査の成果を中心とした知見は以上の通りですが、近世の史料中に「ムダ堀」に関する情報を見い出すことができます。

ひとつは、江戸時代の押立村と下染屋村の検地帳に「むた堀前」「むた堀さき」の小字が記されていることです。この検地帳の作成は延宝6年（1678）ですから、今のところ、これが「ムダ堀」の初見史料といえます。したがって、発掘で得られた所見より若干古い、17世紀後半に「ムダ堀」が存在したことを証明してくれます。

残念ながら、この小字の位置を厳密に特定することはできないのですが、押立村や下染屋村は発掘で確認されている地点の北方や東方にありますから、その方向へ「ムダ堀」が延びていたことを推測させてくれます。つまり、上述の絵図や地図よりも長く「ムダ堀」が延びている可能性があるといえるでしょう。この小字名の位置特定は、これからの課題です。

▼「ムダ堀」の始点

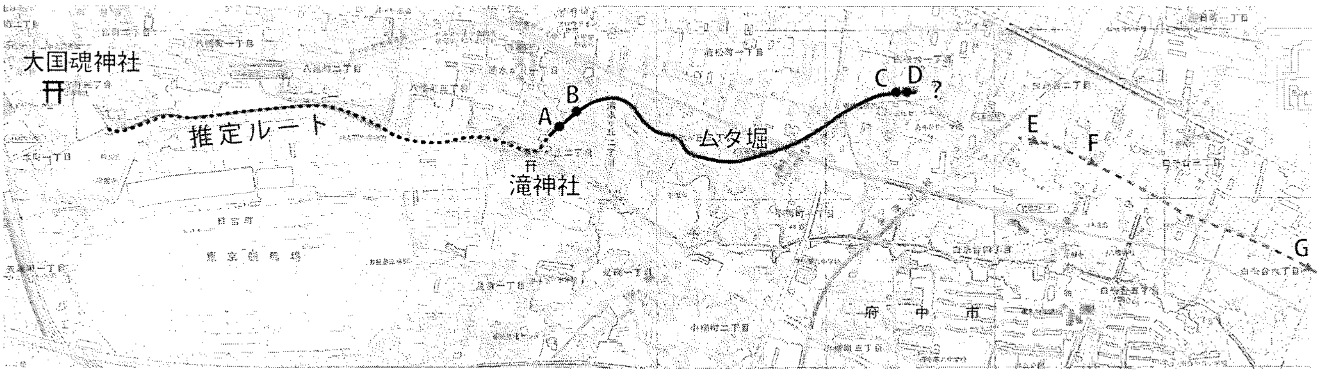
さて、もうひとつ「ムダ堀」に関わる重要な史料があります。『府中領絵図』と呼ばれている江戸時代後期作成の絵図にも、「ムダ堀」が描かれているのです（写真参照）。この絵図では「新堀」と記されていて、当時そのように呼ばれていたことも判ります。注目すべきは、六所宮（現：大国魂神社）のすぐ東側に「堀形此所二止ル」と明記されていることです。従来、「ムダ堀」は、A地点の滝神社付近で段丘崖を降りるものと考えられてきましたが、この地点まで延びていることになります。しかもそのルートはA地点の南で西に折れ、徐々に台地を下って、段丘崖に沿っています。現在、その痕跡は見られませんが、江戸時代後期の記録であるだけに信頼性は高く、「ムダ堀」のルートを追求する上で極めて重要です。



『府中領絵図』部分　「堀形此所二止ル」と明記されている。本社は大国魂神社のこと。上が南。

以上見てきたように、「ムダ堀」に関する史料は、僅かながらも残されていました。17世紀半ばすぎにはすでに地名となっていたことが判明し、そのルートは西へ長く延びることも推測できました。今後さらに関連史料を探索する必要のあることはいうまでもありません。特にルートは、史料からの推測と発掘による検証を積み重ねていく必要がありそうです。

最後に「ムダ堀」が玉川上水を失敗した痕跡なのか否かについて、ちょっとだけ触れておきます。「ムダ堀」と玉川上水との関連を否定する人たちは、A地点の溝の底面の標高が、その南方の低地の標高よりも高いことを取り上げ、水を台地上に流すことが不可能であったと主張しています。しかし、「ムダ堀」の始点がまったく別の地点で、しかも台地下にある以上、この主張は根拠を失ったといってよいでしょう。だからといって、玉川上水との関係を肯定することもできません。最初に述べたとおり、「ムダ堀」そのものの性格究明こそ必要なのです。



『ムダ堀』のルート

民具発見　佐藤智敬

最終回　終わりなき発見

これまで民俗資料（民具）を調査し、受入、整理する経験から博物館として、また一個人としてどのような発見があり、それにはどのような意味が見出しうるのか、ということを色々と考えてきました。このように深く考察していける資料は実は少数です。しかし、そのきっかけは何回もあるのです。最終回の今回は近年稀に見る大規模な民具発見の経緯から、どのように博物館に民具がもたらされるかを振り返ってみたいと思います。

博物館としても古い道具類のすべてを寄贈してもらっているわけではありません。当館では原則として①市域で使用されたもの②使用の思い出、来歴の判別するもの③（資料として実際に使用することを前提に）運搬や長期の保存に耐えられるもの、といった基準をもうけています。膨大なモノがあったとしても、これまでの収集活動ですでにたくさん集まってしまっているもの、まったく用途や思い出、伝承が分からないもの、サビや破損が著しいものなどについては寄贈をお断りする場合があります。しかしこのときの資料は我々の予想をはるかに上回る良い資料でした。

住吉町内藤家のコクグラ（穀蔵）。梁には弘化２年（1845）の建立の銘があることを確認した。

蔵調査時の記念撮影。ボランティア資料整理班、住吉町内藤正さん（写真中央）、その左はお手伝いくださった近所の相沢さん（2004年７月２日）

2004年５月中旬、市内住吉町の内藤さんより、敷地内にある蔵を取り壊すことになり、その蔵の内部に昔の道具類がたくさん入っているので必要なものがあれば博物館に寄贈したいとの申し出がありました。そしてその家を訪問し、蔵内部を拝見することとなりました。

５月26日、はじめて内藤家を訪れました。そこでまず目に入ったものは、選別具の唐箕、多摩川で魚を獲るための魚籠、戦後に手に入れたと思われる食器類が多くあることでした。それからさらに細かく見ていくと「小野宮東部」といった旧土地名、文政、天保、明治といった古い銘の記された木箱がたくさんあることからこの蔵には、近隣の人たちと共同で管理、使用したいわゆる共有膳椀の一部が幾星霜を経て収蔵されているのだということが判明したのです。ほかにも古く保存状態の良い資料が非常に多くありそれらを後日選別、分類し寄贈していただくこととしました。

６月23日、第一次資料受入。ボランティア資料整理班の活動を待たず、現在選別している資料群を大型ワゴン車で二往復分運搬しました。共有膳椀に関する資料が中心でした。この時点では、もはや大半のいただくべき資料はいただいたと思っていました。

６月25日、資料整理班活動日、皆で蔵自のみならず、内藤家自体の調査を行うことを決定。７月２日、資料整理班と内藤家の調査。快晴にめぐまれ、蔵内部の道具類を再調査、蔵や家の敷地の採寸、スケッチなどを行いました。その結果資料整理班の手で次々と貴重な資料が発見されていきました。蔵の梁から弘化２年（1845）の銘と建築儀礼に使用したと思われる呪文、同文を記した瓶なども発見されました。さらに「聯」と呼ばれる、近世から和歌や狂歌を記した掛けものや、共有膳椀類、「小野宮廟碑」という石碑（住吉町に鎮座する小野神社に内藤家の先祖が建立した）の文面を印刷するために使用したと思われる版木などが次々と発見され、結局は大型ワゴン車を満杯にして博物館に戻ることになったのです。結果的に第二次資料受入になってしまいました。

７月９日、内藤家について文献をもとに整理しました。そして今後の計画を立て、次回以降資料の整理を行うことになりました。

７月16日、いよいよホコリをかぶった資料群を洗浄するところから作業ははじまりました。毎回十名弱の方々が来てくださるとはいえ、大型ワゴン車満載で三往復分、しかも小さく収納できる大量の膳椀類が主であったので、その作業は長期間にわたりました。資料の洗浄、修理、写真撮影、資料カード作成、写真整理などを段階的に行っていきました。７月中旬からはじまったこの作業もそれから10月７日に至るまで実に12回におよぶ活動時間を要することになったのです。

このような大規模なことはそう多いことではありません。しかし、大小の差はありますが民具発見の機会は毎年何度もあります。それを選び分類し、その価値を考え、次へ生かしていくことが重要なのです。歴史の証拠として、思い出、伝承の記憶として、そして「これはなんだ？」という問題意識など、発見のきっかけをつくる作業はこれからも続いていくのです。

最近の発掘調査

本宿町で土偶が出土

西府町一丁目　府中市教育委員会　西野　善勝

出土した土偶の頭部（高さ 3.0cm）

昨年の秋から発掘調査を行っている第五小学校の西側の府中苗圃内で、縄文時代中期の土偶が 2 点出土しました。1 点は頭の部分で、もう 1 点は胸の部分です。

調査地は「本宿町遺跡」と呼ばれ、縄文時代中期の集落遺跡（ムラの跡）です。南に隣接する第五学童クラブ地区の調査（1990 年）では、頭部・胴体・足の各部分計 11 点の土偶がまとまって出土しました。今回の出土で 13 点の大量出土遺跡となります。

土偶は縄文時代草創期から作られ始め、弥生時代になると作られなくなりました。初期のものは小型で頭などが明瞭には表現されていません。中期になると立体的で自立するものが作られるようになりました。中期はもっとも土偶製作が盛んな時代で、東日本全域に広がります。青森県の三内丸山遺跡や山梨県の釈迦堂遺跡では、1,000 点を越えた出土がありました。

しかし土偶はどの集落遺跡でも出土するものではありません。都内でもまとまって出土しているのは、八王子市の多摩ニュータウン遺跡や神谷原遺跡・宇津木台遺跡ぐらいです。市内では、北西部の武蔵台東遺跡で 13 点出土しています。多くの遺跡では 1 ～ 2 点の出土が普通で、まとまって出土する集落遺跡を拠点的集落（地域の中心的なムラ）と考える研究者もいます。

土偶は女性像が多いことから母性の象徴とされることが多く、頭や胴体や手足がバラバラに出土することが一般的であるため、壊すことを前提として作られたもので、破壊をともなう祭祀行為があったのではないかと推定されています。その一方で完全な形で出土する大型品もあることから地域や時代で異なった意味をもつものとも考えられています。

土偶のその表現は、デフォルメされたものから写実的なものまで多様です。その他の土器のようにその形から機能や用途の推定は困難です。しかし、土偶の姿や表情からは縄文人の精神世界がかいまみえるようです。今回出土した頭部の土偶はハート形の顔面に簡単な目・口がつけられているだけですが、その細工以上の表情が感じられます。作者の託した思いが伝わってくるようです。

縄文時代中期

縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられています。最近の科学的分析法の進歩により、その年代はより古く考えられるようになりつつあります。それによると草創期は約 14,000 ～ 15,000 年前にさかのぼるということで、中期は約 5,500 年前から 4,500 年前頃とされます。自然の恵みを頼りに生活していた縄文時代にあって比較的食料が豊かで、人口も増え大きな集落がつくられた時代でした。

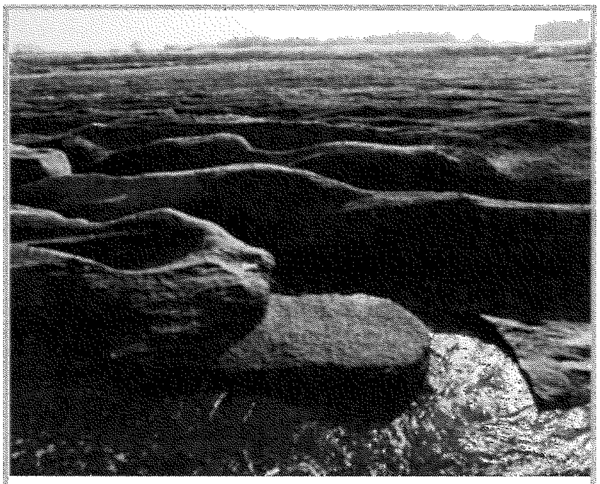
たま RIVER WARS

⑧戦士たちの休息

中村武史

永田地区は、多摩川河口より約52km遡った場所。20～30年程前は玉石で覆われ、河原特有の生物も多数見られたが、年月の経過と共に川底は深く削れて河床が低下し、大雨が降っても河原に冠水せず、細かい土砂が堆積する現状となった。ゆえに本来の植生が失われ昆虫も減少した。何とか河川環境を復元するための研究や工事が進められ、カワラノギクの保全管理もその一端となっている…がそのカワラノギクが何者かによって引き抜かれていたという。証拠もなければ根拠も皆無であったが、4人の見解はただ一つ…サル軍団の仕業に違いない！

羽村の堰で遭遇した男の説明はさらに続いた。「とにかく中学生の冒険は大変結構だが、イカダなんて危ないものでよくここまで来たね。まぁこの先は流れも穏やかになるから本当に気をつけて行きなさい。そうそう折角だからひとつ観察ポイントを教えてあげよう。しばらく下ると秋川との合流点になるが、その向こうには拝島水道橋が見えてくるんだ。そのあたりなんだが実は…」青梅市から狛江市・川崎市にかけての多摩川河原には上総層群と呼ばれる、泥や砂が海底に堆積し形成された地層が所々で露出する。この新生代第四紀の海成層には当時の貝化石や植物化石が多く含まれるが、昭和３６年に昭島市の多摩川河床から体長約１６mのほぼ完全な形で約３００～５００万年前のクジラ化石が発見されている。アキシマクジラと命名されたこの化石は骨格復元され、現在国立科学博物館が所蔵している。さらに平成１１年には約１７０万年前の古代ゾウの足跡化石が２４個も見つかったのである。２０～３０ｃｍのこの足跡は、ゾウの群れが上流から下流を目指し歩いていた動かぬ証拠となった。その他にも同時代のイヌ属の下顎やシカの仲間の偶蹄類化石も発見されている。ゾウの足跡は型取りされ、昭島市役所に保存されている。「…つまりこうした化石の宝庫なのさ。多摩川が語る古代ロマンへの招待ってところかな、よ～く観察してごらん。さらに下った先、八高線鉄橋のあたりにはその海成層が露出しているからこれも必見だよ！…おっともうこんな時間か、それじゃぁ無事を祈るよ」言いながら男は足早にその場から去っていった。



第四紀の海成層が露出する昭島付近
佐藤秀明『多摩川』（1993年　山と渓谷社）より

「ねぇ、どう思う？」ハニーが複雑な表情で全員に問う。「どうって何が？」セイコとタウエが同時に聞き返すと、ハニーは自身の疑惑を語り始めた。「今の人、どこかで会ったような気がするのよね。思い出せないけど、話を聞きながらずうっと考えてたんだ。そしたら声までどこかで聞き覚えのある感じになってきて…どうかしちゃったのかな私」すかさずエノキンが反応し、「不可思議な事に巻き込まれているのは事実だし、あまりにも非日常的な世界を体験したせいで多少頭も混乱しているのかもね。気にすることはない、デジャヴュの一種みたいなもんさ。それよりあの人が言った通り、この先で多摩川ロマンを満喫したらもう帰ろうか？」…そう、無我夢中で川下りに没頭していた４人だったが、気が付けばホームタウンは目と鼻の先である。日も大分傾きかけており、エノキンの一言はまさに他の３人の帰巣本能をくすぐった。「サル捕獲は諦めちゃうのか？」男のタウエは目的途中で離脱することをどこかで拒んでいるようだったが、意外にもか弱いイメージの強かったセイコがこれに同調して発言したのだ。「違うよ、１回お家に帰ってリフレッシュしてから明日また集まればいいんだよ～、ね」…この冒険で一番成長したのはセイコかもしれない。とにもかくにも日暮れは近く、全員一致で一旦それぞれの家に戻ることにした。

比較的緩やかな流れに乗ったイカダは、悠々と両サイドを通過する岸辺の表情で４人を楽しませながら水面を滑っていく。「ほらそこが秋川との合流点だ。あっちに見えるのが例の水道橋だな」エノキン得意の解説が始まった。「古代ゾウの足跡はこの辺で見つかったんだっけ？確かに想像しながら見ていると太古からメッセージが聞こえるような気がするよ…」日野用水堰を越えると、なるほど灰色の砂粒が集まったような独特の地層があちらこちらに顔を出していた。「第四紀の海成層だ…な。大昔はこの辺も海だったなんて信じられるかい？クジラや貝化石の他にもその時代の植物やプランクトンの化石も見つかるそうだぜ」エノキン劇場がしばらく続いたが、やがて中央線鉄橋が見え始めると谷地川、さらに日野橋が迫ってくると残堀川が本流に流れ込み、ついに中央道をくぐり抜けて浅川との合流点に到着した。「あ～帰ってきたな、ホント」タウエが安堵の表情を浮かべる。「よし、ここにイカダを置こう。みんなゆっくり休んでくれよ、明朝8時にまた集合だ！」エノキンの号令とともに帰路を目指し歩を進める多摩川戦士たちの背後を真っ赤な夕焼けが美しく染め上げていた。

……こんな夕方でもポツリポツリと釣り人が糸を垂れている。日没であたりが暗くなりかけている状況にもかかわらず一心不乱に竿先を凝視する様子は、かえって微笑ましくさえ映る。川沿いの堤防を自宅に向かって歩きながらハニーはそんな情景をぼんやりと眺めていた。「本当に熱心な人たちだわ…この川のあらゆる所でひたすら水面を見つめて…上流から下流と、どこにでも出掛けて行くのかな…釣り人…おじさん？…ア～ッ！」ついに頭の中で縺れていた糸が一瞬にして解け始めた。

つづく

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

〒183-0026 東京都府中市南町 6-32　TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/